

試し読み版  
(第1章まで)

昭和の記者ドラマの原点が現代を舞台に蘇る  
島田一男脚本ドラマ「事件記者」再始動

# 事件記者

報道癒着

酒井直行  
原案・島田一男

新波出版

〈島田一男脚本ドラマ「事件記者」再始動シリーズ〉  
事件記者 [報道癒着]

著：酒井直行

原案：島田一男

---

◆◇ 本作品は、試し読み用のサンプルです ◇◆

◆◇ 製品版（全 12 章）のうち、第 1 章を無料でお読みいただけます ◇◆

製品版は、[Amazon Kindle ストアにて配信中](#)です。

(Kindle Unlimited 読み放題対象)

## まえがき

この小説は、最高視聴率 47.1 %を記録した群像サスペンスドラマの金字塔「事件記者」(NHK / 作・島田一男 / 昭和 33 年～ / 全 399 回) を、個性あふれるキャラクターたちはそのままに、群像劇の面白さ、意外な切り口で世間を風刺する視点の鋭さ、人情味溢れるキャラクター造形を最大限活かしつつ、社会性や通俗性を鑑み、オリジナルストーリーで現代社会を舞台に再始動した作品です。

---

## 目次

- 第 1 章 「警視庁桜田記者クラブ」
- 第 2 章 「機動捜査隊」
- 第 3 章 「特ダネ取材」
- 第 4 章 「狐と狸とイタチたち」
- 第 5 章 「取調室」
- 第 6 章 「ひさご」
- 第 7 章 「送検」
- 第 8 章 「逃亡」
- 第 9 章 「自殺」
- 第 10 章 「連続殺人」
- 第 11 章 「仮説」
- 第 12 章 「報道癒着」

## 登場人物

### 〈警視庁桜田記者クラブの事件記者たち〉

相沢……東京日報所属、キャップ  
伊那……東京日報所属、新人記者  
八田……東京日報所属、嘱託職員  
山崎……東京日報所属、司法記者兼任  
浅野……東京日報所属、司法記者兼任  
浦瀬……中央日日新聞所属、キャップ  
岩見……中央日日新聞所属、若手記者  
熊田……新日タイムス所属、キャップ  
青海……新日タイムス所属  
荒木……新日タイムス所属  
鶴岡……毎朝新聞所属、キャップ  
亀田……毎朝新聞所属  
市村……毎夕新聞所属、司法記者兼任、キャップ  
桜井……毎夕新聞所属、司法記者兼任、唯一の女性記者

### 〈警視庁関係者〉

村田……警視庁捜査一課刑事、巡査部長  
山田……警視庁捜査一課刑事、巡査部長  
遠藤……警視庁捜査一課刑事、巡査  
松島……警視庁捜査一課刑事、警部補  
美藤……警視庁捜査二課刑事、警部。相沢の同級生  
本田……警視庁警備部、巡査  
上野……警視庁機動捜査隊隊員、巡査部長。元田無署刑事  
長谷部……機動捜査隊隊員、警部補

### 〈その他〉

伊集院一郎……都議会議員、次期国政選挙で出馬予定の大物政治家  
露木功一……伊集院の公設第一秘書  
森……東京地検特捜班の敏腕検事、検事正  
竹井……東京地検検事  
おチカ……警視庁近くの小料理屋「ひさご」の女将  
やす子……おチカの大学生の娘、モデルをしている



# 第1章

## 警視庁桜田記者クラブ

事件記者。それは、警視庁や大阪府警など主要な警察本部に常設されている記者クラブ詰めの新聞記者のことを言う。彼らは、24時間、事件を追い、記事にすべく走り回る。時に事件記者は、警察が未だ掴みきれていない重要情報をスクープし、事件の早期解決に力を貸す。

事件記者の朝は早い。特に警視庁桜田記者クラブの朝は全国イチ早いとされている。

そもそも警視庁職員の毎朝の出勤時間はおおよそ朝8時と、他の官公庁や民間企業よりずいぶん早い。一応、決められた出勤時間は8時30分なのだが、その時間にノコノコやってくる職員は皆無である。早く出てきた職員の時間の使い方は様々で、年間の練習時間が規則で定められている柔道と剣道の鍛錬に充てる者もいれば、前日にやり残した書類の作成や整理に充てる者もいる。となると、彼らに付き合う形で、記者クラブの連中の出勤時間も決まってくる。刑事たちが8時には出勤して仕事を始めているのに、彼らから情報を入手する事件記者たちがそれより遅れて出勤してきては、聞ける話も聞けなくなってしまう。ということで、いつしか、警視庁の事件記者たちは8時より前に記者クラブに入るのが当たり前のようになっていた。

全ては特ダネを掴むために。

今朝も、東京日報の相沢キャップがあくびを噛み締めつつ、地下鉄桜田門駅の階段を駆け上がり、目の前にそびえ立つ18階建てのビルの中へと入っていく。梅雨の晴れ間から覗く太陽が、日中の気温上昇を予感させた。

正面玄関入ってすぐのセキュリティチェックゲートに飛び込むと、顔馴染みの制服警官と朝の挨拶を交わす。

「おはよ。今日も男前だね」

声をかけられた制服警官は一瞬かすかに微笑むが、言葉を発することなく小さく一礼ただけで、相沢の鞆をX線検査機へと入れ、相沢をゲートの向こうへと進ませる。

昔はこんなじゃなかったのにな。

相沢は、毎朝のことながら警察官とマスコミ関係者との間が他人行儀になってしまったことにため息をつく。

鞆を受け取った相沢はその足で地下鉄の改札ゲートと同じ造りをした入館ゲートに記者クラブ専用のICチップ入りの入館証をかざし、中へと入っていく。

記者クラブのフロアは2階である。相沢はいつもエレベーターを使わず、階段を駆け上がることにしている。とはいえ、四十を超えた年齢としては、わずか三十段強の階段でも息が切れるようになってきた。

桜田記者クラブの扉を開けると、目の前に飛び込んでくるのは各社共有の応接セットのスペースだ。使い古された革張りのソファに杖を片手に深く腰かけている初老男性がいきなり声をかけてくる。

「キャップ、遅かったなあ。ワシなんか30分も前から来ておるぞ」

彼は通称、<sup>はった</sup>八田老人。八田もまた東京日報の事件記者である。もっとも、現在の正式な肩書は「元」であり、今は「<sup>しよくたく</sup>嘱託記者」および「<sup>さ</sup>育成指導員」であるが。更に言えば、みんなから八田老人と呼ばれてはいるが、年齢は六十五になったばかりで、まだまだ老人の<sup>はんちゆう</sup>範疇には入ってはいない。しかし、足を悪くして以降、杖をついていることもあり、記者クラブの面々からは愛着を込めて老人呼ばわりされている。本人もてんで気にしてはいない様子だ。

「まだ7時半過ぎじゃないですか。朝が早い年寄りと一緒にしないでくださいよ」

相沢も例によって八田を老人扱いしつつ、彼の前に座り、ソファの前のテーブルにずらりと並べられている各新聞社の朝刊を一つひとつ手に取り、広げていく。

出勤途中の電車内で、各新聞社の電子版朝刊にはスマホで一通り目を通してきているのだが、やはり、毎朝きまっつての特オチ特ダネのチェックはインクの<sup>にお</sup>匂いがまだ残る新聞紙面で確認するに限る。

「特オチはなし。他社の特ダネも……なし、か」

「そうそう、ドキドキもしてられんよ」相沢の<sup>あんど</sup>安堵の表情に八田もニタリと笑う。

「今日だったよな？ 新しいのが来る日」

八田が壁に貼ったカレンダーを嬉しそうに見ている。

「ええ。昨日の社会部の部長との電話では、少し早めに行かせるからとは言われていたんですけどね」と言いつつも相沢は、最近の若いヤツにとっては、少し早めの出勤というのが何時になるのやらと失笑を浮かべた。

この前、わずか6日で音を上げた新人記者が初日、記者クラブ室に駆け込んできたのは8時59分だった。その上で、「ギリギリセーフ」と叫びやがったものだから、相沢がいきなり「バカヤロー！ 警官たちが8時には出勤しているのに、一時間も遅刻してきて、セーフなわけあるか」と、どやしつけてしまった。警視庁記者クラブの出勤時間が本社勤務の時より一時間も早いという基本情報をど忘れしていたのか、それとも何らかの伝達ミスにより知らされていなかったのか、その辺りの事情は定かではなかったものの、彼は記者クラブに初出勤していきなり遅刻し、上司に怒鳴りつけられたダメな新人記者というレッテルを<sup>は</sup>剥がすことができないまま、1週間後、「自分には事件記者は向いていませんでした」と部長に早々に異動願を出して去ってしまったのだった。

その後、新人記者が辞めたのはキャップの初日の叱責しっせきのせいだと、相沢は八田からさんざん嫌味いやみを言われ続けた。そしてようやく数ヶ月遅れで、今日、代わりの新人記者が補充されることになったのだった。

「キャップ、くれぐれも若い子には優しく頼むよ。せっかく育成指導員という肩書をいただいたのにじゃ、指導せんうちに辞められちゃあ、働きがいがないというものじゃよ。なあ。このワシに免じて……この通り」

八田がニタニタと笑みを浮かべつつ芝居しばいがかった一礼をする。

「八田さん、よしてくださいよ。新人には優しくしろと、社会部部长だけじゃなく人事部からも、さんざん念押しされているんです。大丈夫ですよ」

相沢は苦笑しつつ頭かを掻いた。元来、相沢は柔和にゅうわな性格で通っている。それは自他共に認めるキャラクターである。にもかかわらず、最近、若い者に対してのみ、どうしても一言余計に言いたくなってしまうのだ。

オレも年を取ってきたのかな……。

説教臭くなってきたらそれは老いた証だと、いつかカミさんに言われたっけ、と、どうでもいいようなことを思い出しつつ、相沢は一人苦笑いを浮かべるしかなかった。

「それにしても、新人くんはいつやって来るつもりなんじゃ？」

八田が壁時計を見上げた。7時50分。前回の失敗こに懲りて、今度来る新人には社会部部长から警視庁記者クラブのしきたりをしっかり伝えてくれと念を押してきたはずだ。

そろそろ来てもいい頃なんですけど、と相沢も視線を壁に向けたその時だった。内線電話がかかってくる。

「はい。桜田記者クラブ……え？ 1階警備？ 怪しい人物？」

電話の相手は、先ほど、正面玄関のセキュリティゲートで相沢の挨拶ぶつちょうづらを仏頂面ぶつちょうづらでやり過ごしたあのイケメン警官だった。

「お忙しいところ申し訳ございません。あの……見慣れない若い男が東京日報の入館証を持って、自分は事件記者だと言っているんですが……」

慌あわてて1階の警備室へと飛び込んだ相沢にイケメン警官が敬礼をする。彼は自らを警備部警備課ほんだじゆんさの本田巡查だと自己紹介した上で、

「彼……東京日報の事件記者だと申しているんですが、相沢さん、ご存知そんじでしょうか？」

イケメン警官の前には、いかにも大学出てすぐの、スーツがまだ体に馴染んでいないひよろっとした長身の若い男が無然ぶぜんとした面持ちで立っている。



「初めて会う顔です」相沢は意地悪く言ってのけた。写真では見ていたものの、実際、彼に会うのは今日が初めてだ。ウソはついていない。

「冗談はよしてください。伊那真吾、本日付で東京日報本社社会部に配属されたれっきとした事件記者です！」

「事件記者とはこれまた驚いたね。伊那ちゃんとやら、君は今日から自分が事件記者だと思っているつもりなの？」

相沢はよせばいいのに伊那の言葉をスルーできず、大人気なくも突っかかる。

「当然でしょう。警視庁記者クラブに配属になった以上、僕は正真正銘の事件記者なんです。あなただって……」

伊那はそこまで言って口を噤む。どうやら同じ社の先輩記者であるとは認識している様子だが、名前までは出てこないようだ。

「私は相沢。東京日報のキャップを拝命しています」

「あなたが相沢キャップですか。失礼しました。お噂は社会部部长からかねがね」

「どんな噂をしてるのやら」

「いえ。部長は、ものすごく相沢キャップを褒めていました。相沢キャップは事件記者の鑑だって」

「鑑ねえ。ま、一応、私は事件記者の端くれだという自負は持っている、かな」

「でしょう。だったら僕だって事件記……」

相沢は我慢しきれなくなったように、伊那の言葉を遮って、

「事件記者っていうのはね、事件記事を一本でも上げたブンヤが名乗れる肩書なんだ。申し訳ないが、伊那ちゃん、記者クラブに入ってきたばかりの君を一人前の事件記者だと認めるのはまだ早いんだよ」

相沢は極めて優しい口ぶりで、しかしきっぱりと新人記者に凶に乘るなど釘を刺すのを忘れなかった。

「す、すみません。お恥ずかしい限りです」

伊那は顔を真っ赤にして頭を掻く。相沢はそんな伊那を見つつ、素直ないい若者じゃないかと途端に彼のことが気に入ってしまった。

「それにしても、よくセキュリティゲートで、彼が昨日まで記者クラブに出入りしていた人間ではないことに気づきましたね」

尚もシュンと下を向く伊那を見ていられなくなった相沢はイケメン警官に向き直った。

「当たり前です。自分は、毎朝毎朝、相沢さんたち記者クラブの面々をセキュリティチェックさせていただいているんです。最近、誰が太り気味で誰が徹夜続きで体調を崩しているかまで分かっているつもりですよ」

イケメン警官、もとい本田巡査は胸を張って言い切った。

彼はこんなにも饒舌じょうぜつなんだと相沢は驚いていた。そんな相沢の表情に気がついたのだろう、本田巡査は急に顔を赤らめ、「すみません」と謝った。

「謝ることはありませんよ。私はね本田さん、嬉しいんですよ。てっきり、あなたに嫌われているとばかり思っていましたから」

「嫌うなんてとんでもない！……ただ……」

「ただ？」

本田巡査が慌てて口を噤んだ。「いえ……なんでもありません」

「分かっています。上から言われているんでしょ？ マスコミの人間とはあまり親しくするなって」

相沢は、伊那から少し離れ、本田だけに聞こえるように囁ささやいた。

「すみません」本田巡査は即座に認めた。

「八田さんによれば……あ、八田さんは知ってるよね？ うちのご長老さん。彼は、ずいぶん昔から記者クラブに出入りしているブンヤだからね。その彼に言わせると、昔はそれこそ、捜査一課の刑事たちと記者クラブの連中が一緒になって近くの居酒屋で酒を酌み交わしたり、家族同士の付き合いなんかも頻繁にあったらしいよ。けどさ、時代がそれを許さなくなってしまったってことなんだよね」

「申し訳ございません」

本田巡査がもう一度頭を下げた。相沢は、彼は一体誰に対して謝っているんだろうと漠然と思いつつ、その謝罪を笑顔で受け入れる。

相沢は伊那を連れて記者クラブへと戻った。

「想像していたより、案外広いんですね」

入ってくるなり伊那は、グルリと記者クラブ全体を見回し、素直な感想を口にする。

警視庁本庁舎の2階にある記者クラブは、2階フロア全体の約半分を占めてしいる。なるほど、占有面積せんゆうでいえばかなりのスペースだ。

「もっとも、新聞社に割り当てられたスペースは、猫の額ほどしかないけどね」

相沢は、記者クラブフロアの入ってすぐの共有スペースに一番近い位置にある東京日報ブースあごを顎で指した。応接セットの向こう側の本棚で仕切られた所に、机が2つと業務用プリンター、そして隣のブースとを隔へだてる壁代わりに背の高い本棚が2つあるだけの、狭い空間せまがそこにあった。

「あのエリアが我が東京日報のブースだ。君の机は手前だ」

「うわあ、漫画喫茶のペアシート並の狭さですね」

東京日報ブースに足を踏み入れた伊那の言葉に、相沢は相槌あいづちを打つことができなかった。もちろん、漫画喫茶のペアシートに入ったことがないから、共感しようがないのだ。

代わりに、共有スペースの応接セットでくつろいでいた八田が、  
「テレビ局は各社、5倍のスペースがあるんじゃ」  
とパーテーションで仕切られた記者クラブ奥のテレビ局ブースを顎で指す。  
「ワシが新人でここに来る前は逆だったそうじゃ。新聞社のブースが大半で、テレビ局なんざあ、隅<sup>すみ</sup>っこにちょこっとあっただけらしいぞ」  
「それ、いつの話です？」相沢が聞き返す。  
「ワシが来たのが今から40年以上前だから、その前っていうと、昭和50年よりずっと昔の話じゃが」

「古すぎますよ、それは」  
テレビがまだ広く普及する前、つまり昭和30年代から40年代前半までは、八田の言うとおり、ここは、新聞各社がほとんどそのスペースを占領していた。中でも、新聞発行部数日本一のしのぎ<sup>けず</sup>を削る東京日報新聞社と中央日日新聞社、<sup>ちゅうおうにちにち</sup>新日タイムス<sup>しんにち</sup>3社の占有面積はかなりのもので、記者クラブに常勤する事件記者たちも各社4名から6名と相当の大所帯だった。だが、テレビ全盛の世になるにつれ、記者クラブに占めるテレビと新聞のスペース比率は逆転した。

朝昼夕、そして夜の報道ニュースで生中継する必要があるテレビ各局には必然、空間を広く使うことが許され、どんどんスペースが大きく広がっていった。それに<sup>あいたい</sup>相對して、新聞各社のスペースは徐々に小さく狭くなっていき、今では猫の額ほどしか与えられなくなってしまったのだ。

そして現在、新聞各社の常勤事件記者の数はほとんど1名か2名という構成にまでなってしまった。東京日報もまた、常勤の事件記者は相沢キャップただ一人の状態がしばらく続いていたのだ。

「じゃあ、僕と同僚記者は誰もいないってことですか？ おっかしいなあ、部長の話だと、キャップの他にも何人かおられるって聞いていたんですが」

説明を受けていた伊那が意外そうに周囲を見回した。

「ワシのことかな」

八田が杖に体重をかけながら、ゆっくりと立ち上がる。

「東京日報の生き字引、八田さんだ。伊那ちゃんの教育係だよ」

相沢の紹介を受け、八田が伊那に右手を差し出した。

「よろしく頼むよ、伊那ちゃん」

八田も相沢と同じく、伊那をちゃん付けして呼ぶつもりらしい。

「さっきの部長の話だが、昔と違って今は、社会部の事件記者たちは何ヶ所かに分散して配置されているんだ。ここから皇居に向かってすぐの所に東京地検があるじゃろ。そっちの司法記者クラブの方にも、ウチの事件記者が詰めておる。ヤマさんこと山崎記者と、<sup>あさの</sup>浅野のダンナこと浅野記者の2人……彼らも東京日報社会部のれっきとした事件記者なんだが、向こうは検察と裁判所から出てくるネタを中心に動いとる」

「なるほど。部長は、その先輩たちのことを言ってたんですね、きっと」

「たぶんな」

八田と相沢は顔を見合わせつつ<sup>うなず</sup>頷いた。

「じゃあ、続いては、他の新聞社の事件記者たちを紹介するとするか」相沢がそう言いながら、背丈より高い本棚で仕切られた隣のブースを顎で指しながら、東京日報ブースから移動しようとする。

「えー、ライバル会社の人たちはおいおいでいいですよ。初対面だとなんか気まずいし」伊那が尻込みするように言う。

「初対面のくせして気まずいとはこれいかに？」八田が愉快そうに質問する。

「だって、記者クラブって、こんな隣り合わせの、声なんか絶対筒抜けの狭いエリアの中にもかかわらず、ライバル社の人たちを蹴落<sup>けお</sup>として、特ダネを掴まないといけないんですよ。逆に特オチなんかしちゃったら始末書モノなわけでしょ。そんなギスギスした関係なんですから、こっちから挨拶して舐<sup>な</sup>められたくないんですよ。僕は記者クラブの他社の連中と仲良くするつもりは全くありませんから」

伊那はおそらく、ここに来る前に記者クラブという仕組みを勉強してきていたのだろう。その上での自分なりの考えのようだった。

「なるほどねえ。ま、一理はあると思うけど、記者クラブの他社の事件記者との関係は、そんなに単純じゃあないんだよ」

相沢が伊那の肩をポンポンと叩き、いいから挨拶に行くよと彼を<sup>うなが</sup>促し、東京日報ブースを出て、隣の新日タイムスのブースの前に立つと、そこにはドアがないにもかかわらず、まるで見えないドアがあるかのように立ち止まり、

「クマさん、いいかい？ ウチの新人を紹介したいんだけど」

と、目と鼻の先にいるメガネをかけた四角い顔の新聞記者に声をかける。

「やあ、相さん、そいつが今度の新人かい？ 今度は一週間で辞めさせないでくれよ」

クマさんと呼ばれたその人物は、新日タイムス社の事件記者、熊田<sup>くまだ</sup>キャップだ。熊田は、相沢の後ろで少し緊張した面持ちの伊那を見て、「なるほどな。いい面構えしている。いきなり自分のことを事件記者だとお名乗り申しただけのことはありますね」と冷やかした。

「す、すみません」と赤面して俯うつむく伊那を振り返りつつ、愉快げに笑う相沢が、「さすがはクマさんだ。情報早いねえ。今期も特ダネ競争の最大のライバルといったところだね」とおだてると、熊田は「それはこっちのセリフですよ。ウチは、東京日報さんに追いつけ追い越せが社訓の新聞社ですから」と笑い飛ばした。

新日タイムスでの紹介を終えた相沢は、すぐ隣の中央日日のブースを覗く。そこでも相沢は、ブースの手前から、奥のデスクに座り朝刊チェックをしているウラさんうらせこと浦瀬キャップに、「中央さん、今、いいですか？」と声をかけた。

浦瀬は顔を上げ立ち上がると、自分からブースの手前まで歩いてくる。もっとも、それは距離にしてわずか1メートル50センチではあるが。

その間、相沢は一步も前へとは進まない。

「東京日報さん、おはようございます。彼が例の敏腕新人事件記者殿ですな。東京日報さんはとんでもない秘密兵器を送り込んできたわけですね。お手柔らかに頼みます」

ここでも伊那の「僕は事件記者です」という名乗りを弄られ、さすがに伊那も「いい加減かんべん勘弁してください」と泣き顔を見せる。

「ガンさんはまだかい？」相沢が浦瀬たずに尋ねる。

「一昨日が宿直だったもんだから、今日は遅番おとといで11時から入ります。どうせ休みの昨日は朝までどこかで飲み歩いていたはずですから、二日酔いで酒の匂いプンプンさせて来るんでしょけど」

「違うないね」

相沢は、浦瀬の推理に同意しながら、「この岩見いわみっていう記者が君が来るまでは一番の若手だったもんだから、若い者同士、気が合うんじゃないかって思って、すぐに紹介したかったんだけどね」と振り返って伊那に耳打ちする。

その後も、隣のブースの毎朝新聞社まいあさの前まで伊那を連れて行き、ブースの中でモーニングコーヒーをすすっていたツルさんつるおかこと鶴岡キャップと、ちょうど出勤してきたばかりのカメちゃんかめだこと亀田記者に伊那を紹介した。

「これで最後ですか？」

記者クラブエリアをグルリと周り終えた伊那が先読みして相沢に尋ねると、「いや、もう一社、テレビ局ブースの手前の少しだけ離れたエリアに、毎夕新聞社まいゆうが入っているから、そこで、市村いちむらキャップと春乃はるのちゃんを紹介したら終わりだね」

「女性記者がいるんですか！」

伊那がパッと表情を明るくさせた。

「おいおい、いつの時代の話をしているんだ。今時、女性記者なんか珍しくもない」  
「ですが、警視庁記者クラブの事件記者は仕事がハードすぎて、女性記者には務まらない  
とっていました」

「まあね、実際、長続きする子はあまりいないね」

相沢も伊那の先入観を肯定する。

「で、春乃さんて記者は……美人ですか？」

伊那の単刀直入な質問に、相沢は思わず吹き出して、

「伊那ちゃん、素直だな。ますます気に入ったよ。君は大物になる素質十分だよ」と激励  
しつつ笑い飛ばす。

「ありがとうございます。で、美人さんですか？」

「美人というより可愛いかわいタイプかな？ なんだい、伊那ちゃんは彼女はいないの？」

「現在募集中なんです」

「どういう子がタイプなの？」

「まずは顔。こう見えて僕、メンクイなんです。ファッションモデル系のキリッとした美人に弱いんですよ。そして性格は少々ワガママでもいいので、自分の意見をハッキリ言う子が好みなんです」

「ほお……モデルタイプのキリッとした美人でワガママで意見をハッキリ言う子ねえ」

相沢が何故か、したり顔を浮かべフムフムと顎をこす擦る。

「え？ キャップ、誰かそういう子、知っているんですか？」

相沢の誰かを思い浮かべたかのようなその表情に、伊那が飛びついた。

「うん……知らなくもないけど」

「どういうお知り合いなんです？ 今度、紹介してください！」

伊那が思いのほか食いついてくる。

「分かった分かった。いつかきつと紹介してあげる」

「本当ですね！」

尚も必死な形相で言い寄る伊那を軽くいなしつつも、相沢と伊那は、テレビ局エリアと新聞社エリアの中間地点にポツンと位置する毎夕新聞社ブースの前までやってくる。

伊那には心なしか、東京日報や新日タイムス、中央日日などより、更に一層狭く感じた。ブースの中は無人だった。

「残念。市村キャップと春乃ちゃんは今日もお留守だったか」

中を覗き込んだ相沢が小さく肩をすくめた。

「今日も？ 記者クラブに常勤してるんじゃないんですか？」

「うん。この毎夕新聞社っていう新聞社は、ウチや新日さんたちとは若干毛色じゃっかんが違う新聞社なんだ。元々は名古屋の夕刊専門紙からのスタートで、そこから東京に進出し、全国紙となったわけだが、今でも本社は名古屋でね、東京はあくまでも支社扱いなんだ。それもあって、市村キャップと春乃ちゃんは、ここ以外にも、東京地検の司法記者クラブと国

会議事堂の政治記者クラブの3つとも掛け持ちしててね、すごいハードスケジュールなんだ」

「それで、ブースも小さいし、新聞社のエリアからも少し離れているんですね」

「ブースが離れているのは、一番最後に記者クラブに入ってきた新聞社だからね。ここしか空いてなかったんだよ」

「あーあ、春乃ちゃん、一目会って見たかったなあ」

「おいおい、君はキリッとした美人がタイプなんだろう？ 春乃ちゃんは全然違うからな」

「それでも、です」

不在のところもあったとはいえ、全ての新聞社への挨拶回りを終え、東京日報ブースへと戻ってきた相沢に、伊那がふと思い出したように、

「ところで、キャップが各新聞社のブースの中に一歩も足を踏み入れなかったのにはやっぱり理由があるんですか？」と尋ねる。

「お、気づいていたのか？ 優秀優秀」相沢が嬉しそうに頷いた。

「我々、記者クラブに詰めている事件記者にとって、ライバルである他社の事件記者たちの動向に目を光らせるのも仕事の一つだ。他社が極秘に特ダネを追っているのに気づかず、それを見逃してしまい、特オチなんぞしてしまったら、目も当てられない」

「はい」

「だからといって、他社の事件記者たちの会話を盗み聞きしたり、彼らが書いている記事原稿を後ろから盗み読みしていいって言うものでもない。そこには紳士協定があるんだ」

「だから、他社のブースの中には決して立ち入らないこと……となるわけですね」

「そうだ。別にドアがあるわけでもない。雑談を装って、ブースの中に入り、つけっぱなしのパソコンのテキスト画面を見ることだって可能だ。でもそれをやっちゃいけない……それが記者クラブで共に仕事をしている事件記者たちの暗黙の了解であり、最低限のルールなんだ。分かるね？」

「よく分かります」

「とはいえ、他社の連中が今、どんなヤマを追って、どんなネタを掴んでいるのかを他愛のない会話や態度などから瞬時に察知することは、優れた事件記者に絶対に必要な能力でもある。この辺りの線引が難しいんだよ」

「なるほど……」

伊那は分かったような分からなかったような微妙な顔つきで頷いてみせた。

「それはそうとキャップ……そろそろ、例の汚職事件、立件できそうな雰囲気だっていう噂を地検の司法記者クラブから聞いてきたんじゃが」

それまでのほほんとした雰囲気で相沢と伊那の会話を横目で見ていた八田が、いきなり声のトーンを落とし、周囲に聞き耳を立てている人間がいなかったことを確認しつつ、2人に小声で囁いた。



相沢は伊那に対して、『例の汚職事件の噂』について話して聞かせる。

それは、東京都議会議員の与党重鎮じゅうちん いじゅういんいちろうの伊集院一郎に関するきな臭い話だ。この伊集院が選挙区地元の公共工事入札に際して、とある企業から多額の賄賂わいろを受け取った疑いがあり、その極秘捜査が大詰めを迎えているのではないかとの噂だった。

「いいかい伊那ちゃん。政治家の汚職事件の捜査は、その政治家がどれだけ政治的権力者であるかどうかで捜査する組織自体が異なるんだ。国会議員による全国規模の汚職事件となれば、その捜査主導権は警察ではなく、検察庁、それも検察庁特捜部が担当する」

「ロッキード事件やリクルート事件などがそのいい例ですよ」

「優秀優秀。伊那ちゃん、なかなか勉強しているね」

相沢が褒めると、伊那が調子に乗って、思わず、

「もちろんです。だって僕はこれでも事件記……いえ、なんでもありません」

伊那が慌てて言葉を飲み込むが、相沢も八田も、失笑を通り越して、吹き出すしかなかった。

「でね、都議会議員の汚職事件となれば、その捜査チームは通常、警視庁刑事部捜査二課が担当するんだが、伊集院一郎は次の衆議院議員総選挙に与党から立候補することが確実視されている権力者だ。そうやすやすと簡単に逮捕起訴できるタマじゃあない。慎重に慎重に事を運ばないと、いつ政府からの横槍よこやりが入るかもしれん。それもあって、捜査二課の刑事たちは、東京地検特捜部と連携して極秘で捜査を進めていると言われていた。けども、昨日までの時点で、ウチの政治部の情報つなを繋ぎあわせても、逮捕につながる有力情報はなかったんだ」

「それがな、昨夜遅くなんじゃが、東京地検の特捜部がどうやら招集をかけているとのネタを、向こうの司法記者クラブに出向いとるヤマさんが掴んできたようなんじゃ」

「いよいよですか。こりゃあ、久しぶりに忙しくなりそうですね」相沢は自らを発奮はっぶんさせるべく、両手で両頬をバシンバシンと叩くのだった。

それから数時間後の11時前。

地下鉄霞ヶ関駅かすみがせきから地上へと出てきたとある男がいた。

彼の名は、岩見。

彼もまた警視庁記者クラブの事件記者の一人である。彼が在籍する新聞社は、相沢たち東京日報のライバル社である中央日日新聞だ。

彼は記者クラブの面々からは「ガンさん」「ガンちゃん」と呼ばれ、愛されていた。実はガンさん、少し抜けたところがあり、ぬいぐるみの熊さんのような見てくれも相まって、記者クラブのイジられ担当の名物記者だった。

そんな岩見が、二日酔いから未だ抜けきれていない風で頭痛に悩みつつも、警視庁の正面玄関を通り、中へと入っていく。そして顔見知りの受付婦人警官たちに愛想あいそを振りまきつつ、セキュリティゲートを通りすぎようとしたその時だった。

いきなり数人の屈強な体つきの男たちが岩見を取り囲む。

一瞬、たじろぐ岩見だったが、目の前の男たちが顔見知りの刑事だと分かったと、笑顔を崩した。

「なんだ。捜査一課むらたの村田さん。驚かさないでくださいよ」

「ガンさん、ちょっとよろしいですか？」

村田刑事の顔は強張こわばっていた。

村田たちは、岩見をセキュリティゲートの奥の別室へと連れ込む。わずか数時間前に、初出勤してきた伊那を怪しい人物発見こうそくと拘束したあの場所である。

「なんですか、改まって」

岩見は訳わけが分からず混乱していた。

「ガンさんは昨夜……いえ、岩見さんは昨夜から今朝にかけて、どちらにいらっしまったのでしょうか？」

村田が真顔で尋ねる。

「……は？」

「今朝はご自宅からのご出勤じゃないんでしょうか？」

普段は軽口かるくちを叩き合う間柄の顔見知りの刑事である村田からの他人行儀な質問に、岩見は怪訝けげんそうにしながらも、昨夜は夜勤明けの休みだったこともあり、夕方から飲みに出て、何軒もハシゴ酒し泥酔でいすい、そのまま終電を逃し、夜の街をうろついた挙句あげく、ネットカフェで仮眠しつつ朝まで時間を潰し、そのままネットカフェでシャワーを浴び、ここにやってきたことを説明した。

「お一人で？」

「……一人で飲んだくれちゃあ、いけませんか？」

村田刑事は、その答えを残念そうに聞いていた。その上で言葉を選びつつ、

「岩見さん、任意でお話を聞かせてもらえませんか？」と岩見を鋭く見つめる。

「どういうことですか？」

「同じ記者クラブ仲間である、毎夕新聞社の事件記者、桜井春乃さんをご存知ですね？」  
「当たり前でしょう。春乃ちゃんと言え、記者クラブのマドンナです。知らないはずありませんよ」

「今朝、桜井春乃さんのご遺体が発見されました。他殺です」

村田は淡々と告げる。

「コ、コロシ!？」岩見は息を呑んだ。

「桜井さんの遺体は、岩見さん……あなたの自宅マンションで発見されたんです」

「!？」

岩見は絶句したまま、目を見開くしかなかった。

「中央日日新聞社事件記者、岩見孝太郎さん。毎夕新聞社事件記者の桜井春乃殺害容疑で任意同行願います。時間、6月17日午前11時3分。確保」

## 製品版のご案内

---

閲覧ありがとうございました。

サンプルはお楽しみいただけましたか？

製品版は、[Amazon Kindle ストアにて配信中](#)です。

(Kindle Unlimited 読み放題対象)

Amazon Kindle ストア内の本作品ページにある「無料サンプルを送信」をご利用いただきますと、第2章序盤までの、ほんの少しですが、これより長いサンプルをお読みいただけます。

こちらも、ぜひ、ご利用ください。